

# シンポジウム・ランチョンセミナー

11月25日(土) 大会2日目

## ■ 第1会場

9:00~10:30

### 渡1 国際協力の場で働く人のレジリエンス What Resilience means in the field of international cooperation

座長：松永 優子（東京医科大学病院渡航者医療センター）

#### 渡1-1 国際協力の場におけるメンタルケアとメンタル不調事例 Psychological care and the case of psychiatric disorder in International cooperation

端詰 勝敬  
東邦大学医学部心身医学講座

#### 渡1-2 メンタルヘルスマイntenランス How to Maintain Mental Conditions

成瀬 和子  
東京医科大学医学部看護学科

#### 渡1-3 海外赴任中に役に立つ力、レジリエンスを強化するには Resilience training for Japanese expatriates

市川 佳居  
一般社団法人 EAP コンサルティング普及協会、レジリエ研究所

**概要** JICA等を通し、国際協力の現場で働くことを考えている医療者や、すでに様々な立場で関わっている専門家を対象に、逆境においてもしなやかに対応できる力（レジリエンス）について考える機会を提供する。

仕事や生活、それを取り巻く環境、文化、言語、習慣…母国とは著しく異なる状況で活動している国際協力関係者。彼らはもともとタフな者ばかりなのか、それとも何らかの方法でメンタルを鍛えてきたのか。

JICA 顧問医、国際協力派遣経験者、レジリエンス強化研修実施者、それぞれの立場から、以下のテーマで話を聞く。

- 1) 国際協力の場におけるメンタルケアとメンタル不調事例について
- 2) メンタルヘルスマイntenランス：実際に国際協力の場で働いた経験から
- 3) 海外赴任中に役に立つ力、レジリエンスを強化するには

最後にシンポジストへの質疑応答の時間を設け、会場の参加者と双方向性のある学びの機会としたい。

10:30~12:00

### 渡2 グローバルな視点から考えるジカウイルス感染症の現状と課題 Current situation of zika virus infection and it's concerns on the global aspect

座長：大石 和徳（国立感染症研究所感染症疫学センター）

濱田 篤郎（東京医科大学病院渡航者医療センター）

#### 渡2-1 ブラジル東北部における先天性ジカウイルス感染症の疫学と医療事情 Epidemiology of congenital Zika virus infection and health care system in Northeastern Brazil

鈴木 忠樹  
国立感染症研究所感染病理部

**渡 2-2** ベトナムにおけるジカ熱の流行とジカウイルス感染による小頭症例  
Zika Virus Infection and a Child with Microcephaly in Vietnam

長谷部 太

長崎大学・熱帯医学研究所・アジア-アフリカ感染症研究施設・ベトナム拠点

**渡 2-3** シンガポールにおけるジカウイルス感染症の状況および在留邦人の意識に関する報告  
Situation of Zika virus infection and awareness toward the disease among the Japanese residents in Singapore

吉川みな子

京都大学学術融合教育研究推進センター

**渡 2-4** ジカウイルス感染症の疫学と診療体制  
Global epidemiology and Japan's medical care for zika virus infection

大石 和徳

国立感染症研究所感染症疫学センター

**概要** ジカウイルス感染症は蚊媒介性ウイルス感染症であり、蚊媒介以外にも母子感染、性行為等を介した感染経路がある。2015年以降、中南米、カリブ海地域、さらに南太平洋地域、アジアや北米への地理的拡大も見せている。また、妊婦のジカウイルス感染が母子感染を介して先天異常の原因になることが確認されている。

2017年以降も世界的に脅威となる感染症であるが、南米、東南アジア地域など流行国における疫学、妊婦を含めた医療の実態の詳細は不明である。

今回、南米での調査経験のある鈴木先生、ベトナムで疫学調査を行っている長谷部先生、シンガポール及び日本で国民の意識調査および医療体制整備を行っている吉川先生、大石先生を演者として、会員とともにグローバルな視点からジカウイルス感染症の現状と課題を考察する

13:30 ~ 15:30

**熱 4 From tropical to planetary medicine (JSTM / JAXA 共同企画)**

座長：狩野 繁之（一般社団法人日本熱帯医学会理事長）

下田 陽久（東海大学）

**熱 4-1** 宇宙技術と健康  
Space Technology for Health

向井 千秋

東京理科大学特任副学長、宇宙航空研究開発機構（JAXA）技術参与

**熱 4-2** Using fire information from remote sensing to characterize health effects of air particle pollution in an equatorial city in Southeast Asia

Chris Fook Sheng Ng

長崎大学熱帯医学研究所

**熱 4-3** 宇宙・UAV・IoT 技術の連携によるマラリア対策支援サービスの開発  
Geographic Transmission Analysis of Malaria for the Monitoring System Development

大平 亘

東京大学空間情報科学研究センター

**熱 4-4** ラオスの気候変動とマラリア：地球観測衛星データを用いた空間疫学解析  
Climate change and malaria in Lao PDR: Spatial epidemiology using earth observation satellite data

松本 - 高橋工ミリー

国立研究開発法人 国立国際医療研究センター研究所熱帯医学・マラリア研究部

## 熱 4-5 リモートセンシングで何が観測できるか What can be measured by remote sensing

下田 陽久  
東海大学情報技術センター

### パネリスト／モデレーター

福田 徹  
リモート・センシング技術センター

#### シンポジウム紹介／座長あいさつ

1994年7月9日、アジア女性初の宇宙飛行士・向井千秋さんを乗せたスペースシャトル「コロンビア号」が米・フロリダ州ケネディ宇宙センターから打ち上げられた。パイロッドスペシャリストとして搭乗した向井さんが、宇宙メダカの生育や宇宙環境が人体に与える影響の調査などの実験スケジュールを2週間にわたってこなし、同年7月23日に地上に帰還した。群馬県出身の私は、同郷の女性宇宙飛行士の勇姿に、憧れと、そして誇りをもって、それを映すテレビ画面に食い入って見ていた。そしてコロンビア号に積んだ群馬県旗を、当時の小寺知事に返還するために帰郷する向井さんと、新幹線の中で偶然隣り合わせた。思いきって話しかけて、にこやかに対応してくれた向井さんへのドキドキ感が今日また再び蘇る。

本シンポジウムは、日本熱帯医学会と宇宙航空研究開発機構（JAXA）とが共同で企画した。2016年から、世界の開発目標は「Sustainable Development Goals (SDGs)」を掲げて、健康が地球の隅々にまで届く Universal Health Coverage (UHC) を目指す。これらの達成を加速化させるために、地球規模課題解決型の Tropical Medicine を、いま Planetary Medicine へどのように発展させていくべきかを考える。その paradigm shift の考察を、向井千秋さんに特別講演いただく。

そして現在、人工衛星からの地球観測データは、光学とレーザーの両方のセンサーで、水平・垂直方向ともに5mの精度で全地球をくまなく観測できるようになった。このリモートセンシングにより、広域の環境情報を定期的に、また長期的に取得できるようになった。気温、降水量、火山噴煙、海面水温、海上風速・風向、地表面温度、土壌水分、植生など、極めて高性能の地球観測衛星データが蓄積され、データによっては20-30年分の情報を活用することも可能である。近年のGIS技術の発展に伴う詳細な空間的・時間的解析情報に地理情報を連結した疫学解析を行い、世界の感染症や災害対策に応用する学術研究に注目があつまっている。地球観測衛星データの公衆衛生分野での活用を行っている国内研究グループからシンポジストを選んで、それぞれ具体的な共同研究を紹介してもらう。

向井千秋さんを囲んでのパネルディスカッションも準備した。

日本熱帯医学会理事長 狩野 繁之

15:30 ~ 17:30

## 熱 7 日本の熱帯医学、我ら今何を為すべきか Tropical Medicine in Japan — Our Action toward the future

座長：多田 功（九州大学名誉教授）  
鈴木 守（群馬大学名誉教授／元学長）

### 熱 7-1 日本の熱帯医学の今 Current trends of Japanese Tropical Medicine

狩野 繁之  
国立国際医療研究センター研究所熱帯医学・マラリア研究部

### 熱 7-2 グローバル化時代の熱帯医学を考える Possible approaches for the tropical medicine in the global era

大石 和徳  
国立感染症研究所感染症疫学センター

### 熱 7-3 下痢症制圧を夢見た日々 Diarrheal Diseases Control

竹田 美文  
国立感染症研究所

#### 熱 7-4 未来への礎をいかに築くべきか

How should we lay the foundation for the future of tropical medicine and global health?

濱野真二郎

長崎大学熱帯医学研究所寄生虫学分野

#### 熱 7-5 J-GRID の 10 年 (2005 ~ 2014) — 正史と裏面史そして今

永井 美之

理化学研究所

#### 熱 7-6 国際保健と外交

鷺見 学

外務省国際協力局国際保健政策室

**概要** 日本の戦後熱帯医学はほぼ 3 期に分けられよう。第一期は太平洋戦争を経験した医学者達により 1950 年代から沖縄を中心として、研究予算が乏しい環境下で為された。第二期は 1960 年代中期から OECD 加盟に伴い始まった海外技術協力を核とした。東南アジアを中心に ODA 資金で為されたプロジェクト研究が大きな成果を上げた。文部省研究費による学術研究の開始も特筆される。これらを基盤としてアフリカや中南米においても熱帯病研究が展開された。第三期は 1980 年頃から ODA マネーの戦略転換に伴う国際保健を中心とした活動と文科省の研究費による研究で、海外旅行医学という企業要望も大きく WHO 等への日本人の参加も活発になった。現在、日本の医学部から寄生虫学は消滅し微生物学領域や保健関係講座でも熱帯医学への関心消退が顕著である。日本は今後どのような熱帯医学を指向すべきか。積極的な指針を創出すべきである。このシンポジウムでは世代や立場の異なる専門家によりこの問題を論じる。

## ■ 第 2 会場

9:00 ~ 10:30

### 国 1 東日本大震災と福島第一原子力発電所事故による健康への影響

\*都合により本シンポジウムはキャンセルとなりました

10:30 ~ 12:00

### 国 3 日韓の国際保健医療協力連携に向けて ラオスにおける技術協力プロジェクトの成果と教訓 The mutual collaboration between Korean Society of Global Health (KSGH) and Japan Association of International Health (JAIH) — Good practice and Lessons learned on the technical cooperation projects in Lao PDR

座長：中村 安秀 (甲南女子大学看護リハビリテーション学部)

#### 国 3-1 The challenge and strategy on medical education and training in Lao PDR, and the need for cooperation between S. Korea and Japan

Jaewook Choi

The Korean Society of Global Health, Professor of Department of Preventive Medicine, College of Medicine, Korea University

#### 国 3-2 KOICA's Midterm Health Strategy 2016-2020

Jinsoung Song

Korea International Cooperation Agency (KOICA)

#### 国 3-3 ラオスの保健セクター・コーディネーションにおける日韓連携

Korea-Japan cooperation in sector-wide coordination in Lao health sector

野田信一郎

国立国際医療研究センター国際医療協力局

### 国 3-4 ラオスにおける医療協力活動の経験 Our Experience of Health Cooperation in Laos

浦部 大策  
聖マリア病院国際事業部

**概要** 昨年開催された日本国際保健医療学会学術大会（於：福岡県久留米市）において、Jae Woo Choi 韓国国際保健医療学会理事長が招待され、SDGs に関するシンポジウムにおいて講演を行ったが、今年度は中村安秀日本国際保健医療学会理事長が同学会より第 8 回韓国国際保健医療学会に招待された。その際、両学会長間で意見交換がなされ、今後の日本と韓国の国際保健医療協力連携に向けて合同シンポジウムを開催することが合意された。

シンポジウムでは両国がともに技術協力プロジェクトを展開しているラオスを事例として、両国の国際医療協力における政策、戦略、実施手法等について紹介、検討するとともに、今後の日韓の国際保健医療協力連携に向けての方策を模索する。併せて、日韓の国際保健医療学会連携をどう行うかについても考えたい。

13:30 ~ 15:30

## 国 6 No Health without Peace-A Case of Palestine

座長：桐谷 純子（東京大学大学院医学系研究科国際地域保健学教室）  
藤屋 リカ（慶應義塾大学看護医療学部）

### 国 6-1 Health of Palestinians

Rita Giacaman  
Institute of Community and Public Health, Birzeit University

### 国 6-2 Health Issues for Palestine Refugees: “No health without peace: why SDG16 is essential for health”

清田 明宏  
The United Nations Relief and Works Agency for Palestine Refugees in the Near East (UNRWA)

### 国 6-3 No Peace without Justice - How to achieve the Palestinian sovereignty and self-determination through health?

Taizo Imano  
School of International Liberal Studies, Chukyo University

### 国 6-4 Peace driving health: Peacebuilding and human rights theory and practice as bridge to improved public health outcomes, with Palestine as a case study

Paul Diffil  
Department of Global Innovation Studies, Toyo University

### 国 6-5 Muslim and Global Civil Society as An Agency of Humanitarian Work and Resolving Conflicts? The Case of Gaza Strip, Palestine

Iyas Salim  
Doshisha University

This symposium is in English

**概要** 平和は健康の重要な決定因子であるが、70 年にわたり、イスラエルとの対立・紛争が続くパレスチナにおいては、平和なしに人々の健康は成り立たない。現在のパレスチナ自治区の状況は、政治的・経済的・社会的にイスラエルの管理から構造的に抜け出せず、イスラエルとパレスチナの経済指標・保健指標には圧倒的な格差がある。また、パレスチナ自治区内にも対立・紛争があり、地区内の経済と始めとする格差は広がる傾向にある。

パレスチナからパレスチナ及びアラブ地域の保健研究をリードするリタ・ジアカマン氏を迎え、国連パレスチナ難民救済機関 (UNRWA) 保健局長の清田明宏氏に加え、日本でイスラームと NGO/NPO 活動に関して研究しているパレスチナ人研究者、パレスチナ地域研究と地政学を専門とする研究者、平和学の立場から構造的暴力の視点でパレスチナ/イスラエル問題を扱いオーストラリアで BDS (Boycott, Divestment, Sanction) キャンペーンに関わっている研究者を交え、学際的な視点から、紛争地パレスチナにおける平和と健康について議論する。

15:30～17:30

## 国 9 海外選択実習で健康格差の社会的要因を学ぶ

Overseas electives as learning opportunities of social determinants of health (SDH)

座長：武田 裕子（順天堂大学医学部医学教育研究室）  
足立 拓也（東京都保健医療公社豊島病院感染症内科）

### 国 9-1 三重大学医学部における海外臨床実習の効果と課題

堀 浩樹  
三重大学大学院医学系研究科医学医療教育学分野

### 国 9-2 筑波大学における海外選択実習～30年の実績とアンケート調査を踏まえて

Thirty-year experience of overseas electives by University of Tsukuba medical students

小曾根早知子  
筑波大学医学医療系

### 国 9-3 文系女子大生の海外選択実習（タイ長期フィールドスタディ）の学習成果と進路選択 The Impact of Overseas Electives (Thai Field Study) at Faculty of Liberal Arts on the Students at Women's University

堀 芳枝  
獨協大学外国語学部

### 国 9-4 自由に活用できる海外選択実習手引書作成：国際協カイニシアティブ

Creating a modifiable overseas elective handbook as a helpful resource for schools of health professions: international initiatives

武田 裕子  
順天堂大学医学部医学教育研究室

**概要** 急速に進むグローバリゼーションは医療者教育の国際化も促進し、海外で学生が学ぶ機会は大幅に増加している。海外選択実習は、異文化理解にとどまらず貧困や所得格差から生じる健康格差、限られた医療資源の再分配など、健康の社会的要因（SDH）をより明確に認識し学修する機会となっている。

本シンポジウムでは、毎年60名近い学生を海外に送り出している三重大学医学部と、30年以上前から海外実習に取り組む筑波大学に、実践経験とその成果を発表いただく。また、東南アジアにおけるフィールドワークでの指導経験豊富な教員に、特に中低所得国での実習の進め方とSDHの学習とのつながりを報告いただく。

最後に、発表メンバーが共同で作成した「海外選択実習手引書」を紹介する。多数の医療系学生を中低所得国に送り出している英国・米国・カナダの大学の手引き書から枠組みを抽出し、豊富な実例を含むテンプレートとなっている。ウェブで入手し目的に応じて改編し利用いただける。

## ■ 第3会場

9:00～10:30

## 熱 1 臨床熱帯感染症ワークショップ

Workshop on Clinical and Tropical Infectious Disease

座長：宮入 烈（国立成育医療研究センター感染症科）  
中村（内山）ふくみ（東京都保健医療公社荏原病院感染症内科）

### 熱 1-1 発熱と乾性咳嗽を主訴に受診した3歳男児

A 3-Year-Old Boy with Fever and Dry Cough

清水 彰彦  
亀田総合病院感染症科

**熱 1-2 発熱が持続するギニア渡航後の 4 歳女児**

A 4-year-old girl with persistent fever after returning from Guinea

荒木孝太郎

東京都立小児総合医療センター感染症科

**熱 1-3 心肺停止状態で搬送された 11 歳男児**

An eleven-year-old boy presenting critical arrhythmia and cardiac arrest followed by cerebral infarction

米田 哲

JCHO 九州病院小児科

**概要** 本ワークショップでは、熱帯感染症患者を担当した医師に最終診断名を明らかにしない形で症例を提示してもらい、演者からワークショップ参加者への質疑応答、あるいは参加者から演者への質疑応答というインタラクティブ形式で進行し最終診断に至ります。それを通して症例へのアプローチ（鑑別診断、検査、最終診断）を共有することを目的としています。同様のワークショップは第 47 回熱帯医学会大会から毎年開催され、熱帯感染症診療に携わる多くの医療関係者に参加をいただいています。

グローバルヘルスに関わる医療関係者、研究者は現地へ赴いて仕事に従事することが多く、本学会でもそのような演題が多いと思われます。しかし熱帯感染症では流行地と非流行地での臨床像が異なることもあり、日本で勤務する医療関係者への教育、啓蒙といった学会の社会的貢献の側面も本ワークショップは担っていると考えます。

10:30 ~ 12:00

**国 4 国際保健人材育成と WHO コラボレーティングセンター**

Human resource development for Global Health and WHO collaboration center

座長：仲佐 保（国立国際医療研究センター国際医療協力局）

**国 4-1 WHO 健康都市・都市政策研究協力センターの活動と研修の機会**

Capacity building opportunity at a WHO Collaborating Centre for students and early career professionals

中村 桂子

東京医科歯科大学大学院国際保健医療事業開発学分野

WHO Collaborating Centre for Healthy Cities and Urban Policy Research Secretariat of the Alliance for Healthy Cities

**国 4-2 多職種連携教育の WHO 連携活動による国際保健人材育成**

Global health workforce development through collaboration with WHO on interprofessional education

渡邊 秀臣

群馬大学保健学研究科

**国 4-3 国立国際医療研究センターにおける国際保健に関する継続教育プログラム**

橋本千代子

国立国際医療研究センター

**国 4-4 聖路加国際大学におけるグローバルヘルスに貢献する若手看護人材育成**

Human Development in Global health at St. Luke's international university

長松 康子

聖路加国際大学大学院看護学研究科

## 国 4-5 国立保健医療科学院における研修医を対象とし国際保健も加味した地域保健研修の経験 A NIPH Training Course for Junior Residents Cultivates Global and Public Health Mindset

曾根 智史

国立保健医療科学院

**概要** 2015年に厚生労働大臣が招集した「国際保健に関する懇談会」において、国際保健政策人材の育成を国全体として実施していくことが提言された。2017年9月に国立国際医療研究センターに、国際保健人材育成のためのグローバルヘルス人材戦略センターが設置された。

一方、我が国には、WHO コラボレーションセンターが、2017年4月現在、35存在し、様々な分野で国際保健に貢献している。その中でもいくつかの施設が、保健医療人材の育成にも取り組んでいる。2017年4月に国立国際医療研究センターで開催された日本のWCCが集まったの連携ワークショップでも人材育成に関しての協議がされ、日本人の人材育成にWCCを活用できないかということが提案された。

本企画では、WCCが、これまでの単体としての協力ではなく、日本全体として共同のプログラム、特に若手の人材育成に関してどのような役割を果たせるかに関して議論を交わす予定である。

12:15 ~ 13:15

### ランチョンセミナー 1

共催：サノフィ株式会社

座長：尾内 一信（川崎医科大学小児科学主任教授）

#### LS-1 意外と知らない、世界で流行している髄膜炎菌感染症

Remember dreadful invasive meningococcal disease spreads worldwide, for which we have an effective vaccine

中野 貴司

川崎医科大学小児科学

13:30 ~ 15:30

### 熱 5 緊急提言：国際的に脅威となるヒアリ・ダニ媒介感染症

座長：樂得 康之（米国 Tulane 大学公衆衛生熱帯医学大学院）

#### 熱 5-1 ヒアリ：強い毒性を持つ侵略的外来生物

寺山 守

東京大学農学部

#### 熱 5-2 マダニ媒介性ウイルス感染症：SFTS

西條 正幸

国立感染症研究所ウイルス第一部

#### 熱 5-3 Closing Remarks

津布久 裕

日本橋医師会

**概要** 最近日本の港湾都市で捕獲される多数のヒアリは中国広東省南沙港からのコンテナに由来する。ヒアリは元来南米産の媒介動物であり、米国、特に Deep South と呼ばれる米国南部地方では 2000 年から既に定着している。またコンテナ輸入元の中国においても 2004 年からヒアリは既に定着しており刺咬により人体にも影響を及ぼしている。

近年日本各地の港湾都市で発見されることが多いが、2017年10月12日内陸部に位置する京都向日市で、女王アリとともに数千匹ものヒアリの死骸が毛布の中に発見されたのは記憶に新しい。この有害生物ヒアリが我が国に定着することが無きように迅速に水際対策・駆除に努めることが重要である。

ダニ媒介ウイルス感染症として重症熱性血小板減少症候群（Severe fever with thrombocytopenia; SFTS）は、致死率の高い疾患として知られている。国立感染症の発表によると 2017 年 9 月 27 日現在 303 人の感染者が報告されており死亡者は 59 人、致命率 19.5%と非常に高く、初夏と秋に流行がみられる。我が国では 2017 年には猫、犬を介しての感染も報告されており日常生活においても注意が必要である。



近年日本では地球温暖化によるゲリラ豪雨被害や、節足動物媒介疾患が増加傾向にあり、この二つの媒介感染症は正確な情報・知識・対策により対処することが重要であると考えられる。

15:30～17:30

## 国 10 UHC 実現に向けた薬剤に関する諸問題 Issues on medicines toward realizing Universal Health Coverage

座長：奥村 順子（長崎大学）  
明石 秀親（国立国際医療研究センター国際医療協力局）

### 国 10-1 途上国における UHC 達成のための薬剤の課題 Issues related to pharmaceuticals to achieve UHC in developing countries

奥村 順子  
長崎大学熱帯医学研究所

### 国 10-2 流通医薬品のグローバルな品質問題と UHC Global quality of medicines in distribution channels for UHC

木村 和子  
金沢大学医薬保健学総合研究科メディ-クウォリティ・セキュリティ講座

### 国 10-3 ラオス国における薬剤供給と UHC との関係 Drug Supply and UHC in Laos

井上理咲子  
国立国際医療研究センター病院薬剤部

### 国 10-4 薬剤のレギュレーションと UHC Drug Regulation and UHC

富永 俊義  
独立行政法人医薬品医療機器総合機構

**概要** 途上国においてユニバーサル・ヘルス・カバレッジ（UHC）達成に向けて必要な、質の担保された医薬品を末端にまで届けるための障害を含めた現状をレビューし、さらに、日本の UHC の成立時期 1961 年（国民皆保険の成立）まで医薬品供給はどのようになされてきたのか、その後、疾病負荷も感染症や母子保健から生活習慣病などに徐々に変わっていく中で、どのような医薬品にプライオリティを置いたのか、といった視点を踏まえつつ、先進国の後をたどる現在の途上国が、何にプライオリティをおき、どのように医薬品の品質や適正使用を担保し、それらを基盤にした保健医療サービスを末端にまでどのように確保していくのか、といったことがあぶり出されれば、と考えている。

## ■ 第 4 会場

9:00～10:30

## 熱 2 太平洋諸島リンパ系フィラリア症制圧（PacELF）：疾病制圧事業成功の要因とカギを探る Pacific Programme to Eliminate Lymphatic Filariasis (PacELF): key elements for success of disease elimination programmes

座長：一盛 和世（長崎大学熱帯医学研究所、長崎大学熱帯医学研究所顧みられない熱帯病イノベーション・センター（NTDi センター）、長崎大学熱帯医学研究所フィラリア NTD 室）

### 熱 2-1 PacELF: as a GPELF success 矢島 綾 World Health Organization, Regional Office for the Western Pacific

## 熱 2-2 PacELF への JICA/JOCV の貢献 JICA/JOCV`s contribution to PacELF

金井 要  
国際協力事業団

## 熱 2-3 PacELF に対する日本のアカデミアの貢献 Could Japanese academia contribute more to PacELF?

平山 謙二  
長崎大学熱帯医学研究所

**概要** 太平洋リンパ系フィラリア症対策 (PacELF) は太平洋の 22 カ国および地域からリンパ系フィラリア症を制圧する目的で 1999 年に設立された。それ以降、世界リンパ系フィラリア症制圧計画 (GPELF) の一環として WHO のガイドラインに沿った対策活動を展開している。

現在、太平洋諸国の多くは集団薬剤投与プログラムを終了し、制圧確認のステージを見据えたサーベイランスの段階にある。したがって太平洋諸国は GPELF のプログラムの中で最も早く制圧ゴールに達する可能性のある地域でもある。一盛と Graves で進めている PacELF endgame project では WHO と連携し公式データの収集、PacELF 各国の状況を把握し、“PacELF endgame Catalog”を作成した。また、制圧終盤のストーリーを各国政府、WHO の合意を得たうえで、「PacELF Book No.2」として出版する予定である。

本シンポジウムでは PacELF endgame project の活動成果から、PacELF を成功に導く要因を考察してみたい。

10:30 ~ 12:00

## 熱 3 グローバルヘルス：日本の女性・若手が世界で活躍するために Japanese women and young generations, be active in various fields of global health!

座長：小林富美恵 (杏林大学医学部感染症学講座寄生虫学部門、一般社団法人日本熱帯医学会)  
一盛 和世 (長崎大学熱帯医学研究所 フィラリア NTD 室、一般社団法人日本熱帯医学会)

## 熱 3-1 日本の女性研究者の現状：グローバル人材育成に向けて Overview of Status of Women Scientists in Japan: The Challenge of Developing Women Global Leaders

山村 康子  
科学技術振興機構科学技術プログラム推進部

## 熱 3-2 国際医療支援の現場から：日本の女性・若手へのメッセージ Delivering international medicine on the ground: A message to young female professionals

赤尾 和美  
特定非営利活動法人フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPAN

**概要** 本企画シンポジウムでは、わが国の女性が、若手が、日本国内にとどまらず世界に進出して活躍するには何が必要とされるのか、合同大会であることを活かして 3 学会の若手・シニア会員の皆で考えたい。

まず、科学技術振興機構 (JST) から山村康子氏をお迎えして、日本の女性研究者の実情について知り、グローバル人材育成に向けて我が国のあるべき姿を考える上で何が不足しているのかについて語って戴く。

次いで、本年 3 月に第 45 回医療功労賞中央表彰 (海外部門) を受賞されたフレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダー JAPAN 代表の赤尾和美氏に、ご自身のラオスでの長いご経験から、国際医療支援の目指すもの、異 (医) 文化理解、ホリスティックアプローチによる医療提供の重要性など具体例を通したお話をして戴く。

その後、3 学会からの代表のパネリスト (当該学会の理事長や理事など) や若手代表のコメンテーターを交えて、会場の皆さんと共に今回のテーマに関しディスカッションを深めていく予定である。

12:15～13:15

## ランチョンセミナー 2

共催：シスメックス株式会社

座長：狩野 繁之（国立国際医療研究センター研究所熱帯医学・マラリア研究部 部長）

- LS-2 マラリア排除に向けた最新動向，その課題と対策～いま，検査に求められることとは？～  
The latest trends, issues and countermeasures toward malaria elimination — What is required for malaria diagnosis, right at this moment? —

プラタップ・シンハシヴァノン<sup>1)</sup>，内橋 欣也<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> マヒドン大学熱帯医学部長・准教授，<sup>2)</sup> シスメックス株式会社第一エンジニアリング部 部長

13:30～15:30

## 国 7 病いと健やかさの多様性（多文化医療研究会／関連集会）

Multiple faces of sickness and health

座長：井田 暁子（独立行政法人国際協力機構（JICA）アフリカ部フランス国立社会高等研究院 ノルベルト・エリアス・センター）  
神作 麗（一般社団法人多文化医療研究所）

- 国 7-1 民族医療と代替医療のあいだ：チリの先住民マプーチェ医療を例に  
Mapuche medicine as an alternative medicine: a case in Santiago, Chile  
工藤 由美  
国立民族学博物館
- 国 7-2 ラオスにおける産後の食物規制と女性の「知識」  
Women's "Knowledge" on Food Restriction during Postpartum Period in Laos  
岩佐 光広  
高知大学
- 国 7-3 「脈」をめぐる医師と患者のすれ違い—循環器疾患のフィールドワークをめぐって  
The meanings of pulse in the eyes of doctors and patients — A qualitative exploration of clinical consultations in cardiovascular diseases  
磯野 真穂  
国際医療福祉大学大学院
- 国 7-4 なぜ日本では反 HPV ワクチン運動が盛んなのか  
Anti-vaccine movement in post-truth era  
久住 英二  
医療法人社団鉄医会ナビタスクリニック立川
- 国 7-5 アフリカの HIV パンデミックと治療のシチズンシップ  
HIV pandemic and therapeutic citizenship in Africa  
西 真如  
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

**概要** 今日，医師は様々なガイドラインや医学教育の中で身につけた知識に基づいて診断を下す。患者の訴えや検査結果などに基づいて疾患が“認定”され，治療や社会保障の対象となる。客観的な診断と治療の技術は次第に高度になってきている。

一方で，人類の歴史が始まって以来，患者の訴えと，治療者を含む患者を取り巻く人々の叡智の積み重ねによって，今日の治療や診断が形作られてきたことを忘れてはならない。患者の言葉を聞かずに，医療は成り立たない。グローバル化する医療の現場において，患者は自らの置かれた状況を，どれほど医療者に伝えられているだろうか。複雑化する現代社会の中で，医療者は患者の苦悩と希望とを，どのようにして汲み取れば良いのだろうか。

本シンポジウムでは，「病いと病むことの多様性」をキーワードにして，様々な国や地域において，異なる文化的背景の中で，患者と医療者との対話を進める可能性について考えたい。

15:30～17:30

**国 11 リソースの限られたフィールドにおける疫学調査：失敗，成功，学び**  
Epidemiological surveys in resource limited settings: failure, success and lessons learned

座長：野中 大輔（琉球大学医学部保健学科国際地域保健学分野）  
木多村知美（国立国際医療研究センター国際医療協力局）

**国 11-1 ラオスにおける B 型肝炎の有病率調査とリスク要因分析**  
Prevalence survey for hepatitis B in Lao PDR

木多村知美  
国立国際医療研究センター国際医療協力局

**国 11-2 ベトナムにおける糖尿病有病率調査とリスク要因分析**  
Prevalence, perception and factors associated with diabetes mellitus in Vietnam

蜂矢 正彦  
国立国際医療研究センター国際医療協力局

**国 11-3 スリランカにおける学童を介した母親の生活習慣改善**  
School-based intervention on children for lifestyle improvement of their mothers

溝上 哲也  
国立国際医療研究センター疫学・予防研究部

**国 11-4 東ティモールにおける健康へのアクセス**  
Access to health in Timor-Leste

樋口 倫世  
名古屋市立大学看護学部

**国 11-5 ニジェールにおけるマラリア対策プロジェクトの疫学的評価**  
Epidemiological evaluation for Malaria Control Project in Niger

野中 大輔  
琉球大学医学部保健学科国際地域保健学分野

**概要** 本シンポジウムは、調査経験の少ない若手を主な対象とする。限られたリソースのフィールドにおいて疫学調査を計画・実行することは、特に経験の少ない若手にとって容易ではない。本シンポジウムでは、以下に挙げた疫学調査の各事例研究発表において、計画からデータのまとめまでの過程、特にサンプリングと調査票作成の過程を中心に紹介する。事例研究と会場参加者との意見交換を通じて、リソースの限られた地域における疫学調査の実施のための tips を共有することを目的とする。

■ 第 5 会場

9:00～10:30

**国 2 世界で何が起きているのか—本当の健康格差を知ること—**  
The true meaning behind what “Health Gap”

座長：櫻庭 唱子（千葉大学看護学部看護学科）

**国 2-1 戸田 隆夫**  
独立行政法人国際協力機構

**概要** 現在、社会経済的要因による「健康格差（Health Gap）」が喫緊の問題となっている。「健康格差」は、様々な疾患、心身を蝕む要因と考えられており、個人を超え家族、集団を取り巻く環境、社会保障政策を含めた社会システムによる影響を受けやすく長期的な課題といえる。

これまで「不健康」は本人の努力不足などと考えられてきたが、近年、研究者らによってその考えが覆されてきている。また「健康格差」が社会経済的要因を持つため国内外の「健康格差」には類似している点も多い。さらに、日本の「健康格差」改善への取り組みや日本の保健システムは世界において先進的なモデルとして注目されつつある。これらが実際どのように世界で役立てられているのか興味深いところである。講師に独立行政法人 国際協力機構（JICA）上級審議役 戸田隆夫（とだ たかお）先生をお招きし、日本ができる国際貢献のあり方について、聴衆との対話を交えながらご講演いただく予定である。

10:30 ~ 12:00

## 国5 健康格差を拡大させる要因とは—感染症と薬剤耐性菌対策に焦点を当てて— What is the factor of the Health Gap? — focusing on infection disease and Antimicrobial resistance control —

座長：城間 美貴（名桜大学人間健康学部看護学科）

国5-1 神馬 征峰  
東京大学大学院医学系研究科国際地域保健学教室

国5-2 山本 太郎  
長崎大学熱帯医学研究所国際保健学教室

**概要** 「健康格差」を拡大させる要因の1つとして、感染症との関係はよく知られている。近年、途上国だけにとどまらず先進国においても、世界三大感染症の薬剤耐性菌が確認されている。先進国においては、「薬剤耐性（AMR）に関するグローバル・アクション・プラン」を各国で策定し対策を行なっているが、保健システムが脆弱な途上国においてどのように対応していく必要があるのか考えていく必要がある。

そこで、東京大学の神馬征峰先生、長崎大学の山本太郎先生に途上国における感染症や持続可能な薬剤耐性菌対策をご教示して頂く。そして、学生もシンポジストとして登壇し、感染症と薬剤耐性菌対策に焦点を当て討議し、先生方と共に持続可能な感染症対策を考えていく。

13:30 ~ 15:30

## 熱6 ベクターコントロール法開発の最前線 New approaches to disease vector control

座長：嘉糠 洋陸（東京慈恵会医科大学熱帯医学講座）

熱6-1 ベクターの生理活性物質と病原体伝播  
Bioactive substances and pathogen transmission of disease vectors

辻 尚利  
北里大学医学部寄生虫学

熱6-2 細胞死誘導システムを利用したマラリア媒介蚊の解析とベクターコントロールへの展開  
Cell death induction system in anopheline mosquitoes

山本 大介  
自治医科大学感染・免疫学講座医動物学部門

熱6-3 “次世代”の殺虫剤抵抗性研究  
Next-generation insecticide resistance research

糸川健太郎  
国立感染症研究所昆虫医科学部第三室

熱6-4 遺伝子水平伝播によるマダニの進化  
Evolution of ticks through horizontal gene transfer

岩永 史朗  
東京医科歯科大学・国際環境寄生虫病学

## 熱 6-5 病原体媒介蚊の制御に向けた多角的ストラテジー

### Integrated strategy toward controlling disease vector mosquito

嘉糠 洋陸

東京慈恵会医科大学熱帯医学講座, 同 衛生動物学研究センター

**概要** 蚊やマダニ、一部の貝によるベクター媒介性感染症において、統合的ベクター対策管理 (Integrated Vector Management: IVM) の重要性は論を待たない。IVM とは、与えられた資源を最大限に利用してベクター対策を行うための合理的政策決定プロセスであり、ベクター伝播疾病の予防と対策に対する貢献を目標とする。この資源には、ベクター対策活動を可能とする技術も含まれ、その技術開発の必要性は年々増している。近年、科学的知見やテクノロジーに基づく様々なベクター制御法が新たに登場している。遺伝子ドライブによる有用遺伝子拡散、優性致死法、不妊化技術、ボルバキア等微生物によるパラトランスジェネシス、BT 剤等による微生物防除、新規誘引剤トラップなど、それらの中にはフィールド試験の実施まで至っているものも含まれる。本ワークショップでは、本邦の衛生動物学研究者を中心に、ベクター制御法開発に向けた最新の知見を紹介したい。

15:30 ~ 17:30

## 渡 3 グローバルヘルスファーマシーの確立に向けて 薬剤師の渡航医学 テイクオフ！ Strategies for the establishment of Global Health Pharmacy in Japan

座長：櫻井真理子 (医療法人拓生会奈良西部病院)

長谷川 充 (帝京大学医学部附属病院薬剤部)

### 渡 3-1 渡航医学と薬剤師～日本におけるグローバルファーマシー構想

#### Global pharmacy project in Japanese travel medicine

濱田 篤郎

東京医科大学病院渡航者医療センター

### 渡 3-2 カナダの薬剤師から考える日本の薬局薬剤師の渡航医学における可能性

#### Potential of Japanese Pharmacists in Travel Health: Things to Learn from Canadian Pharmacists

佐藤 厚

London Drugs

### 渡 3-3 保険薬局におけるトラベルファーマシー実現への取り組み

#### Initiatives aiming to realize travel pharmacy in community pharmacy

瀧藤 重道

このみ薬局, 愛知学院大学薬学部臨床薬剤学講座

### 渡 3-4 危機管理としての薬剤について

#### Crisis management of medicine

古閑比斗志

医療法人社団春日部さくら病院, 東北大学大学院医学系研究科, 近畿大学医学部, 独協医科大学越谷病院, 杏林大学医学部, 奈良西部病院

**概要** 海外旅行の自由化から 50 余年、航空機などの交通機関や通信手段の発達により、海外渡航は日本人にとってごく身近なものとなった。世界のあらゆる地域に、多様な目的で、幅広い年齢層の日本人が渡航する昨今、渡航にまつわるセルフメディケーションの観点からも地域の薬局薬剤師の果たす役割は大きい。しかしながら、渡航医学を業務の一環と考える薬局はいまだ多くない。2019 年にラグビー W 杯、2020 年には東京オリンピック、パラリンピックが開催予定でもあり、さらなる増加が予想されるインバウンドへの対応も含め、制度の整備が喫緊の課題である。日本渡航医学会薬剤師部会としても、地域の薬局薬剤師の先生方に渡航医学の一翼を担っていただくために、いかに働きかけるべきか検討したくシンポジウムを企画した。渡航医学において、様々な分野で活躍されている 4 人のシンポジストにご登壇いただき、今後の薬剤師部会活動の課題について議論したいと考える。

## ■ 第6会場

12:15～13:15

### ランチョンセミナー 3

共催：アステラス製薬株式会社・一般財団法人化学及血清療法研究所

座長：大越 裕文（渡航医学センター西新橋クリニック院長）

#### LS-3 海外渡航時のキャッチアップ予防接種

金川 修造

国立国際医療研究センタートラベルクリニック医長

13:30～15:30

### 国8 国際保健に関する公開ディベート—SDGs（持続可能な開発目標）について真剣に考える— Open Debate on SDGs (Sustainable Development Goals)

コーディネーター：曾根 智史（国立保健医療科学院）

- 国8-1 仲佐 保  
国立国際医療研究センター国際医療協力局
- 国8-2 林 玲子  
国立社会保障・人口問題研究所
- 国8-3 杉下 智彦  
東京女子医科大学国際環境・熱帯医学講座
- 国8-4 野村（馬場）真利香  
国立保健医療科学院国際協力研究部

**概要** ディベートとは、「1つのテーマ（論題）をめぐり、定められたルールに従いながら、肯定側・否定側に分かれて、その優劣を競う討論会」を言う。ディベートの目的は、持論を相手に押しつけることではなく、物事を肯定・否定の両面から見ることでより真実に近づくことである。今回の公開ディベートでは、肯定側チーム2名と否定側チーム2名に分かれ、45分間のディベート試合を行う。聴衆は審判員となって、試合の勝敗の判定に参加していただきたい。

今回のテーマ（論題）は、「SDGs(Sustainable Development Goals:持続可能な開発目標)は人々の健康に貢献できるか、できないか」を取り上げる。グローバルな目標をディベーターの議論を通じて掘り下げていくことによって、SDGsの現時点での pros & cons を明確にし、改めて今後のSDGs 推進について考える機会としたい。

15:30～17:30

### 渡4 トラベルヘルスナースの多様性とキャリア構築 Diversity and Career development of Travel Nurse

座長：長松 康子（聖路加国際看護大学 国際看護学）  
梅村 聖子（東京医科大学病院渡航者医療センター）

- 渡4-1 偶然の機会から広がるキャリア  
Career spread from chance and opportunity  
青柳 美樹  
国際医療福祉大学小田原保健医療学部看護学科
- 渡4-2 運とご縁でつながる  
Treasure every encounter  
福池 智子  
日本航空株式会社健康管理部客室乗務員担当運行訓練部地上教官グループ

#### 渡 4-3 看護職としてのひとつの歩き方

One way of living as a nurse

藤井 誠

東京検疫所東京空港検疫所支所検疫衛生課

#### 渡 4-4 社会人経験を活かした看護職の働き方—多文化共生社会におけるトラベルナースの活躍—

Working style whereby nurses with previous professional experience benefit — Travel Nurses performing duties in the Multicultural society —

二見 茜

国立研究開発法人国立国際医療研究センター国際診療部

**概要** 欧米諸国のトラベルメディスン（渡航医学）で看護職は重要な役割を担っている。日本でも海外派遣企業や検疫所などにおいて古くから看護職が活躍してきたが、トラベルクリニックなどではまだ看護職の人材育成が十分に行われていないのが現状である。その一方、国際保健医療分野では国際経験の豊富な看護職が数多く輩出されており、今後は、こうした人材が渡航医学分野に関与していくことが期待されている。本シンポジウムでは、看護職分野での渡航医学と国際保健医療の連携をもとに、日本におけるトラベルヘルスナースの育成や新たな職場の開拓について検討したい。

## ■ 第 8 会場

13:30 ~ 15:30

### 共 1 医療通訳者の認証と教育研修のシステム：言葉と文化の壁を乗り越える保健医療サービスをめざして Certification of medical interpreters and their education and training programs; towards the health services without the borders of languages and cultures

企画協力：日本国際保健医療学会，日本渡航医学会，日本熱帯医学会，日本国際臨床医学会

座長：中村 安秀（甲南女子大学，日本国際保健医療学会）

尾内 一信（川崎医科大学小児科学講座）

#### 共 1-1 厚生労働省研究班の成果報告

中田 研

大阪大学医学部附属病院国際医療センターセンター長

#### 共 1-2 外国人医療の現場からの提言

Recommendations on medical interpreter systems to meet the needs of migrant health care

沢田 貴志

神奈川県勤労者医療生活協同組合港町診療所，多言語社会リソースかながわ

#### 共 1-3 医療通訳者からの要望

Requests from the medical interpreters

森田 直美

一般社団法人全国医療通訳者協会，東京医科大学人文科学領域英語教室

#### 共 1-4 外国人にとって望ましいシステムとは？

A right for a better medical system for foreigners

中萩エルザ

在名古屋ブラジル総領事館，ブラジル人民委員会 SABJA Disque-Saude 医師

**概要** 日本で暮らす外国人が健康で文化的な生活を営むための基本的人権の一つが医療である。日本人と同等水準の保健医療福祉サービスを提供し、日本を訪問する観光客などに対する安全と安心の確保を行うためには、プロフェッショナルな医療通訳者が必要である。病歴、主訴、診断告知、治療方針などの説明だけでなく、手術やがん告知などのインフォー



ムド・コンセントを実施するには、医療通訳士という専門職が必要となっている。

本シンポジウムは、日本国際保健医療学会、日本渡航医学会、日本熱帯医学会の3学会に加え、2016年12月に設立総会を行った新しい学会である国際臨床医学会を合わせ、4つの学会が企画した学会連携シンポジウムである。グローバル時代における外国人に対する医療サービスの質の改善と向上をめざし、医療通訳者の認証と教育研修のあり方について様々な立場からの熱い議論が具体的な政策提言や行動につながることを切に望みたい。